

日本海区水産試験研究

連絡ニユース

発行所
日本海区水産研究所
印刷所
第一印刷所
株式会社

資源研究雑感

田内森三郎

漁業資源管理の方式を見出そうと思ふ立つたのは二〇年ほど前のことであつた。漁りすぎにならないぎりぎりの限界以下に漁業の規模を抑制することを方針とした。この限界を超えて漁りつづけると資源が漸衰するとした。

環境の事情が同じばかり、漁業の間引が強まれば当然それだけ生残率が低下するはずだ。漁業の発展とともに生残率は低下する。現在の値が資源の安定に必要な値を上回ることが大きいほど増産の余地が大きいとする。

生残率の推定には年令の査定を前提とする。ある人が少數の個体を調べた結果でも

一応はそのままを利用する。漁獲物の体長なり体重なりが測られた結果は、それが漁獲物のほんの一部であつても、一応はそのままを利用する。隔離されたとする特別な事情が環境に考えられないばあいには、地

方的に現われる形態の違いを問わず、同一の漁業対象とみる。細分は将来の課題に残す。

* 東支那海のタイ類ではトロール一網平均

魚がおるということが漁が行われる主要な条件ではあるが、これが漁業の成立する唯一の条件ではない。漁獲物がその母体を

どこまで代表するかについてわれわれの知

めであるとする。このばあいタイが放棄し尾も漁れたサケが明治の末期には三〇万尾そこそこの漁になつた。北海道サケの人工孵化放流事業が明治の中頃に始まつて大正の末昭和の初には、採卵が接岸したサケのみに及んで、サケの漁況が安定した。北海道サケでは生殖する親魚が自然の状態のうだけ残されれば資源が定安する。他の魚族でも事情はこれと大差ないものとみる。

石狩川とその附近で、かつては一八〇万尾も漁れたサケが明治の末期には三〇万尾そこそこの漁になつた。北海道サケの人工孵化放流事業が明治の中頃に始まつて大正の末昭和の初には、採卵が接岸したサケのみに及んで、サケの漁況が安定した。北海道サケでは生殖する親魚が自然の状態のうだけ残されれば資源が定安する。他の魚族でも事情はこれと大差ないものとみる。

尾も漁れたサケが明治の末期には三〇万尾そこそこの漁になつた。北海道サケの人工孵化放流事業が明治の中頃に始まつて大正の末昭和の初には、採卵が接岸したサケのみに及んで、サケの漁況が安定した。北海道サケでは生殖する親魚が自然の状態のうだけ残されれば資源が定安する。他の魚族でも事情はこれと大差ないものとみる。

尾も漁れたサケが明治の末期には三〇万尾そこそこの漁になつた。北海道サケの人工孵化放流事業が明治の中頃に始まつて大正の末昭和の初には、採卵が接岸したサケのみに及んで、サケの漁況が安定した。北海道サケでは生殖する親魚が自然の状態のうだけ残されれば資源が定安する。他の魚族でも事情はこれと大差ないものとみる。

福井京都兵庫府県水試連絡打合会

去る十月二十六日敦賀市福井水試におい

て日本海中部各府県共通の重要な魚種（サバアジ、イカ、ブリ）について漁況の現況速報及び漁況と環境の相関資料の交換並びにこの種の問題についての共同調査研究の打ち合会を行い、早急に実施段階に入ることを打合せた。（日水研）

主なる項目	第70号
・資源研究雑感	田内森三郎
・福井京都兵庫府県水試連絡打合会	美宗
・今後における日本海の沖合漁業の発展はどのように招来したらよいか	杉目宗美
・漁況予報会議開催される	源治
・日本海水試利用担当者会議	加藤源治
・フグの首に輪ゴム	スルメイカの標識放流について
・第9回全国蒲鉾品評会	
・第9回日本海沿岸資源及び底魚資源調査連絡協議会	

日本海の沖合漁業の発展は
将来どのようにしたらよいか

杉宗美

(対馬暖流区域開発調査)も昭和二十八年以來、年を経ること四カ年、この間各府県関係機関の熱心な総合調査によりて日本海の環境、生棲魚族の生態、洄游移動状況及び漁期漁場等が相当分明されてきたようである。漁に結構な事である。

艦かに、いわしさば、あじ、いか、さんま、あぶらざめ等の洄游性魚族の生態面が科学的に調査され、又科学的な漁業技術の改良普及の強化と相俟つて沿岸漁業の生産力が向上してきたようである。

併し之等の調査も暖流水系の幅員以内の限られた水域に於いて主として実施され、漁業も所謂距岸四〇~五〇浬以内に於いて操業されている漁業に限られているよう感じがする。五〇浬以遠沖合の漁業は未知数である。最近日本海沖合の調査が提唱され実施の段階にはあるが、漁場の開拓は未だ程遠いようである。

最近底曳網漁業の不振対策の一環として沖合漁場開発が提唱され大和堆の調査が行われたが、その調査結果によると一曳網当たりの単位漁獲量は好成績を示しているようであるが、漁獲魚の魚種組成は産業的価値

(日本海開発調査)も昭和二十八年以來、年を経ること四カ年、この間各府県関係機関の熱心な総合調査によりて日本海の環境、生棲魚族の生態、洄游移動状況及び漁期漁場等が相当分明されてきたようである。漁に結構な事である。

斯様な点から考察すると、本州側の日本海は五〇〇米以深層は底曳網漁場としては忘却された漁場のような感じがする。全く悲しむ可きことである。それなら今後の沖合漁業の進出、即ち沖合漁業の対象たる新漁場開発の方向は何れの方向に求む可きかが問題である。

日本海の性状は特異な性格を有し、周期的に暖寒性があるが如く思われ最近は目立つて温寒性の魚族は北上し、寒海性の魚族は北遷しつつある傾向がうかがわれる。之等の原因は徹底的に調査される可きは勿論であるが、同時に暖寒両流に接続している

日本海水域に於いても同様で、四〇〇米以深層の底曳網漁業を実施したが、先ず上述のような結果で先ず見込みがないようである。漁に結構な事である。

斯様な点から考察すると、本州側の日本海は五〇〇米以深層は底曳網漁場としては忘却された漁場のような感じがする。全く悲しむ可きことである。それなら今後の沖合漁業の進出、即ち沖合漁業の対象たる新漁場開発の方向は何れの方向に求む可きかが問題である。

日本海の性状は特異な性格を有し、周期的に暖寒性があるが如く思われ最近は目立つて温寒性の魚族は北上し、寒海性の魚族は北遷しつつある傾向がうかがわれる。之等の原因は徹底的に調査される可きは勿論であるが、同時に暖寒両流に接続している

日本海開発調査は、このまま脱却すべきであろう。将来は積極的に沖合漁場を開拓して進出すると同時に、反面沖合漁業の基地としての受入態勢即ち陸上設備を整備すべきである。先ず漁港、大型船の建造、冷蔵冷凍

のない魚種が大半を占めておつて、結論はこの魚族の有用化を計らなければ漁業として採算性がないと述べて居たようであるが、こうなると漁場としての価値があるかないもので、全く無価値のようである。北部

の受入態勢即ち陸上設備を整備すべきである。先ず漁港、大型船の建造、冷蔵冷凍

の流入からは脱却すべきであろう。

将来は積極的に沖合漁場を開拓して進出すると同時に、反面沖合漁業の基地としての受入態勢即ち陸上設備を整備すべきである。

（青森水試場長）

漁況予報会議開催される

第一回日本海中部の漁況予報会議は十月廿六日福井県水産試験場において兵庫、京都

福井の各水産試験場長ならびに担当技師、日本研所長出席のもとに開催された。

協議決定事項は左記のとおりである。

一、目的

三府県に共通な重要魚種としてアジ、ブリ、イワシ

スルメイカの漁況予報を目的として協同作業を実施することとし、

とりえず十一月より三十二年三月までを予備期間として次のとおり漁況速報を行ふ。

なお、四月より漁況予報を実施する。

二、内容と方法

イ 各府県は從来の対馬暖流調査において実施している定線海洋観測を可及的

に頻繁に行ない、その結果を直ちに相互に交換する。京都水試は現在の定線の他、当事業のために特に隠岐堆にまで定線を延長する。又福井水試は能登に向う線を隨時実施する。

ホツク海へ進出すべきである。本年日本海冲合に於ける、マス流網漁業試験操業は優秀な成績を挙げている現況である。今迄の

日本海に於ける漁業は、全般的に半漁半農

型で、然も漁獲の積極的で積極的に泛しいという

日本海水試利用

担当者会議

日本海水試利用担当者会議は昭和三十一年度日本海水試

利用担当者会議は新装なつた浜田市、島根

県水産試験場で資源関係の協議会と同時に開催された。期日は十月十七日~十九日で

青森から山口に至る十二府県の場長、担当

者、及び日本水研から内橋所長、野口利用部長、佃抜官が出席した。
 提出議案の審議、研究発表、業者に対する講演会及び懇談会、工場（乾燥機）及び中海の見学等が行われたが、主なる協議決定事項及び研究発表は次の通りである。

(1) 成分調査のうちイワシについては対馬暖流調査にこだわらず出来るだけ多くの府県が参加する。

(2) 研究者相互の連絡を密にする為年三回程度の当番県の責任で発行する情報をその年当番県の責務で発行する。

(3) 利用、化学関係の研究業は試験場宛の外、兵庫県で開催する。

(4) 次回の担当者会議は明年四、五月の候

(5) 水産乾製品の品質に包装の及ぼす影

る。

(1) 魚類の人工乾燥について

(2) 石川水試 山瀬抜師 島根水試 山本抜師

(3) するめいか肝臓の色相について

(4) 青森水試

(5) 鮎の原料学的研究

兵庫水試 助川抜師
 川県鹿島郡西岸沖合のサヨリ地曳網で採捕された一尾のサヨリだけである（この連絡二

響について 島根水試 丸一抜師
 研究 長峰抜師
 青森水試
 (6) うるめ節の製造試験

石川水試 山瀬抜師
 日水研 野口抜官
 島根水試 丸一抜師
 長峰抜師
 青森水試

（1）『生きのよい魚』について
 業者に対する講演会 日水研 佃抜官

（2）標識票番号 日水研 佃抜官

（3）イカ中毒について 日水研 佃抜官

（4）標識放流と一応考えられるが、私たちの知る範囲ではこのよ

うな事実はまったく考えられず、子供のイ

タヅラにしては魚体が大きすぎること、数

が多いこと、また二年も続けてみられたこ

る。

（5）次回の担当者会議は明年四、五月の候

（6）高周波加熱真空乾燥試験について

新潟水試 小島抜師

（7）魚肉の色沢について

（8）スルメイカ標試放流

（9）鯛の丸味と脂肪含有量について

（10）鯛度保持について

（11）福井水試

（12）山口水試

（13）松森抜師

（14）工場廃水調査

（15）野口抜官

（16）資源化學調査の取締め報告

（17）野口抜官

（18）鮮度保持試験

（19）日水研

（20）ヒヨウタン礁、大和堆

（21）九七三尾

（22）八月十五日、廿五日、廿六日

（23）日水研

（24）日水研

（25）日水研

（26）日水研

（27）日水研

（28）日水研

（29）日水研

（30）日水研

（31）日水研

（32）日水研

（33）日水研

（34）日水研

（35）日水研

（36）日本海沖合スルメイカ資源の

調査のさい大和堆、ヒヨウタン礁において左記のごとくスルメイカの標識放流を実施したので再捕報告について御協力をお願いします。

（37）日水研では日本海沖合スルメイカ資源の

調査のさい大和堆、ヒヨウタン礁において左記のごとくスルメイカの標識放流を実施したので再捕報告について御協力をお願いします。

（38）標識放流期日

（39）八月十五日、廿五日、廿六日

（40）山口水試

（41）松森抜師

（42）工場廃水調査

（43）野口抜官

（44）資源化學調査の取締め報告

（45）野口抜官

（46）ヒヨウタン礁、大和堆

（47）九七三尾

（48）八月十五日、廿五日、廿六日

（49）日水研

（50）ヒヨウタン礁、大和堆

（51）九七三尾

（52）八月十五日、廿五日、廿六日

（53）日水研

（54）ヒヨウタン礁、大和堆

（55）九七三尾

（56）八月十五日、廿五日、廿六日

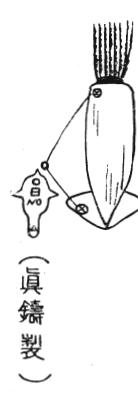
（57）日水研

（58）ヒヨウタン礁、大和堆

（59）九七三尾

（60）八月十五日、廿五日、廿六日

（61）日水研



(眞鑄製)

島根水試 丸一抜師

新潟水試 小島抜師

（62）魚肉の色沢について

（63）魚肉の色沢について

（64）魚肉の色沢について

（65）魚肉の色沢について

（66）魚肉の色沢について

（67）魚肉の色沢について

五、標識票番号

（68）一〇八五〇。九〇一～九七三。

（69）イカ中毒について

（70）日水研 佃抜官

（71）日水研 佃抜官

（72）日水研 佃抜官

（73）日水研 佃抜官

（74）日水研 佃抜官

（75）日水研 佃抜官

（76）日水研 佃抜官

（77）日水研 佃抜官

（78）日水研 佃抜官

（79）日水研 佃抜官

（80）日水研 佃抜官

（81）日水研 佃抜官

（82）日水研 佃抜官

（83）日水研 佃抜官

（84）日水研 佃抜官

（85）日水研 佃抜官

（86）日水研 佃抜官

（87）日水研 佃抜官

（88）日水研 佃抜官

（89）日水研 佃抜官

（90）日水研 佃抜官

（91）日水研 佃抜官

（92）日水研 佃抜官

第九回全国蒲鉾品評会

第九回日本海沿岸資源及 び底魚資源調査連絡協議会

第九回全国蒲鉾品評会が全国水産煉製品協会及び新潟県、市等の共催で十一月七日から十一日までの五日間新潟市小林デパートで開催され、北海道から鹿児島県に到る全国各地から六〇〇余点が出品され盛大であつた。

この品評会は全国各地の技術の交流、製品の品質向上を計るばかりでなく、煉製品の消費宣伝をも企図したものであるが、観覧者も連日一万人に近く、この面においても多大の成果を挙げたようである。

本年の審査から目立つたことは、昨年及び昨年この品評会が開催され、九州（福岡市）及び北陸（金沢市）地区の製品の向上で、この品評会が地元業界に与える影響の大きさことが認められる。また四国地区製品の形状が極めてアグロ接して来たこと東北地区製品に極めて優秀な製品が増加して來たことが注目された。

原料魚類の打開、新販路の開拓等の為に毎年新規製品の出現が期待されるのであるが、本年も矢張り新規製品の出品点数も少く、特に注目されるものも見られず、新規製品の案出が極めて難かしいものであることを示している。明年度は特にイワシ、サンマ、サバ、鯨肉、スルメイカ等の大掛かりな漁獲物を主原料といい煉製品の出品が強く要望された。

5. スケトウダラの標識放流調査
6. 大羽イワシ流刺網漁業について
7. イワシ資源調査経過の総合的見解
8. アジ・サバ等の行動に及ぼす光力の影響
9. 浮・沈子網の大きさと漁獲量の変動
10. 日本海関係十二府県の各水試場長及び担当者、島根県水産課等三十九名で、研究発表及び協議事項について活潑な質疑応答と協議が行われた。その詳細については、発表者の要録とともに島根県水試においてとりまとめ中であるので不日改めてお届けする。
11. 来年度に予定されている第十四回の本協議会は一応山形県水試担当のもとに開催することが内定した。また今後の研究発表については、一・二の問題に集約して、これに関するある研究の発表及び討論を行う旨方針が明らかにされた。
12. なお、研究発表の演題及び発表者、協議事項及びその提出者は次のとおりである。

- 底魚資源の部
1. ムシガレイの耳石成長及び卵の成熟について
 2. 秋田県沿海のハタハタに関する研究（一
　　三報）
 3. 大和堆における底曳試験について
 4. 隠岐近海の底曳漁場について
 5. 沖縄水試　尾形　哲男　口 今後の調査についての質疑及び意見
 6. 日水研　岩島　俊平　日水研　今後の調査についての討議
 7. 島根水試　中野　麟一　日水研　表題についての討議
 8. 島根水試　鳥取水試　中野　麟一　日水研　表題についての討議
 9. 青森水試　鶴川　正雄　日水研　表題についての討議
 10. 青森水試　船田秀之助　日水研　表題についての討議
 11. 山口県　小イワシに関する一・二の知見　日水研　表題についての討議
 12. 山口外海水試　伊藤　健生　日水研　表題についての討議
 13. 沿岸水温変化とマイワシ漁況の関係について　日水研　表題についての討議
 14. 石川水試　舟田秀之助　日水研　表題についての討議
 15. 兵庫水試　山口　繁　日水研　表題についての討議
 16. 新潟水試　山中　一郎　日水研　表題についての討議

第五五回研究談話会

研究発表

1. 青森水試　寺島　朴　島根水試　山崎　繁　十一月二日、日水研講堂において、第五十五回研究談話会が開催された。
2. 秋田水試　山口　正男　青森水試　寺島　朴　十一月二日、日水研講堂において、第五十五回研究談話会が開催された。
3. 大和堆における底曳試験について　日水研　伊藤　祐方　十一月二日、日水研講堂において、第五十五回研究談話会が開催された。
4. 隠岐近海の底曳漁場について　日水研　山中　一郎　十一月二日、日水研講堂において、第五十五回研究談話会が開催された。
5. 沖縄水試　尾形　哲男　口 今後の調査についての質疑及び意見
6. 日水研　岩島　俊平　日水研　今後の調査についての討議
7. 島根水試　中野　麟一　日水研　表題についての討議
8. 島根水試　鳥取水試　中野　麟一　日水研　表題についての討議
9. 青森水試　鶴川　正雄　日水研　表題についての討議
10. 青森水試　船田秀之助　日水研　表題についての討議
11. 山口県　小イワシに関する一・二の知見　日水研　表題についての討議
12. 山口外海水試　伊藤　健生　日水研　表題についての討議
13. 沿岸水温変化とマイワシ漁況の関係について　日水研　表題についての討議
14. 石川水試　舟田秀之助　日水研　表題についての討議
15. 兵庫水試　山口　繁　日水研　表題についての討議
16. 新潟水試　山中　一郎　日水研　表題についての討議